

有珠山の火山活動に関する火山噴火予知連絡会統一見解

有珠山では、3月31日に噴火を開始して以来、現在まで噴火活動が続き、弱いながらも隆起が続いている。

噴火の初期には多数の火口を形成して火山灰を噴出したが、4月中旬以降は活動はいくつかの火口に集中し、間欠的に爆発を繰り返す状態になった。爆発の強さや頻度、噴煙量は次第に低下している。初期の数日間に噴出した火山灰には、新しいマグマを起源とする物質が含まれていたが、それ以降の噴出物には同様なマグマ物質はほとんど見つからない。

噴火開始前後には、有感地震を含む多数の地震が発生したが（最大M4.6）、その後地震活動は急速に低下した。現在も山体西部と南側の深さ数kmを中心に地震活動が続いているが、4月中旬以降震源分布・回数・規模（M2～3）等に大きな変化は見られない。

この間、西山西麓を中心とする大きな隆起が生じ、隆起量は大きなところで60m程度、隆起体積は約4千万m³と見積もられる。隆起速度は次第に減少し、最近10cm/日程度になった。隆起速度の減少に要した時間は、1910年の噴火とほぼ同程度であり、1943-45年の噴火や1977-78年の噴火と比べると1桁以上短い。

以上のように、マグマ活動は次第に低下しており、このままの傾向が続けば噴火が終息に向かう可能性がある。しかし、噴火、隆起、地震活動等が依然として継続していることから、マグマと地下水の新たな接触などによって、現在の活動火口周辺に影響が及ぶ規模の爆発が発生する可能性は、当分続くと考えられる。

また、今後、地下から供給されるマグマの量が増大して、現在の活動域または新たな場所で更に大きな噴火に発展する可能性も否定しきれないが、その場合には事前に地殻変動、地震活動、地表変形、噴煙等の変化をとらえられる可能性が高い。

以上のことから、活動火口周辺では引き続き警戒が必要である。また、新たな活動活発化に対し、火山活動を注意深く監視していく必要がある。